

土地計画入植一五〇周年とその後のチャーティズム研究

古賀秀男

はじめに

成人男子普通選挙権の実現を目指した大衆政治運動として知られるチャーティズムの出発点は、名称の源となる人民憲章 (the People's Charter) が公表された一八三八年五月にあり、それが運動として実際に始まったのは同年八月、またその運動家たちに対して、『タイムズ』紙を含めて運動の内外からチャーティスト (Chartist) という呼称が使われ始めたのは翌一八三九年である。それゆえ、運動の生誕一〇〇年、あるいは一五〇年といえ、一九三八年ないし三九年、もしくは一九八八年ということになる。確かにファシズムと戦争の暗雲が立ち込めていた一九三八年前後には、一世紀を記念してチャーティズムを顕彰するマルクス主義の性格が濃いニール・ステュアート『チャーティラーのための戦い』(一九三七年)、レグ・グロウヴズ『だがわれらは再び立ち上がる―チャーティズム史話』(一九三八年)の二冊が、反ファシズムの性格も併せて公刊されている。またチャーティズム史の注目すべき一齣をなす一八三九年一月のニューポート蜂起の指導者ジョン・フロストについてのデイヴィッド・ウィリアムズの研究者(一九三九年刊)は、「ニューポートのチャーティスト百周年記念委

員会」の勧めにより執筆された最初の本格的な評伝であった⁽²⁾。その後の研究に大きな刺激と影響を与えたG・D・H・コールのリーダーな『チャーティストたちの肖像』(一九四一年)も、明言こそないが、一世紀記念という意識が働いていた⁽³⁾。

チャーティズムは一八三八―三九年の最初の山場をへたあと、一八四二年と一八四八年に大きな高揚があり、その後だいに衰退しながら一八五〇年代まで続くが、その一世紀後は戦中と戦後の時期でもあり、記念する顕著な動きや歴史に残る研究成果は見られなかった。それでも戦後の労働党政権や労働運動の高まりのなかで、チャーティズムに多くの頁をさいたG・D・H・コールの『イギリス労働運動史』の改定新版(一九四七年)、モートン、テイトによる『イギリス労働運動史』(一九五六年)が刊行されている⁽⁴⁾。チャーティズム研究が新たな段階に入るのには、サヴィルのアーネスト・ジョーンズ論(一九五二年)⁽⁵⁾、ショイエンによる優れたG・J・ハーニーの評伝(一九五八年)⁽⁶⁾、マザーによるチャーティズムに対する秩序維持策の研究(一九五九年)⁽⁷⁾をステップにして生まれた、ブリッグズ編の論文集『チャーティスト研究』(一九五九年)によってであった⁽⁸⁾。

次に一五〇周年について見ると、一九八〇年代から九〇年代に入

窓り、英国あるいは一部米国においてチャーティズム研究は一段と熱気を帯び、新境地を開く成果が相次いで公刊されている。その発展・展開のなかで、八〇年代初期にパトリック・ジョイス、クレイグ・カル

フーン、ガレス・ステドマン・ジョーンズらによる、一九世紀の急進主義の連続性を強調し、チャーティストの階級意識と運動の階級的性格を低く抑え薄める修正論が提起された。⁽⁹⁾ いまも熱っぽい論議が続いているこの論点については後に論及する。だがこうした状況にもかかわらず、一五〇周年を鮮明に意識したものは、管見の限りではごく最近までほとんど皆無といつてよかつた。⁽¹⁰⁾ ところがこのような問題関心の状況はその後大きく変化し、まさに一五〇周年を意識しつつ、埋もれていた過去の記憶を呼び戻しその足跡を記念する知的、社会的活動がいくつかの面から展開されている。一九九九年には一時小さなコーナーを設けたロンドンの書店さえあった。

一 土地計画一五〇周年

チャーティズムへの関心の高まりの中でまず注目されべきは、中期後半の局面で大規模な運動になった土地計画 (Land Scheme, Land Plan) に関し、その入植一五〇周年を記念する行事と研究活動である。土地計画が提唱されたのは、人民憲章の制定を求める第二次国民請願が議会で拒否され、労働争議に端を発し人民憲章を要求する大衆的ストライキ (地域ゼネスト) に発展・高揚したイングランド北部の運動も挫折し、一八四二年秋以降運動は手詰まりの様相に陥り、チャーティズムは沈滞状態になったときであった。一八四三年にファーマス・オコーナーによって提起されたこの土地計画は、四五年にはチャ

ーティズムの一翼を担う大がかりな運動となり、四七年をピークとして四九年まで続いた。

土地計画とは、地主の独占、大農場経営者の支配から土地を勤労者の手に取り戻すという基本的立場に立ちながら、支持労働者大衆から分割払いの株を発行して少額ずつ資金を集め、その資金で購入した所領を一世帯二〜四エーカー単位の小農場に分け、低賃金と不安定な雇用のもとにある都市労働者などから株主を募り、くじ引きで小農民として入植させる運動である。目的はやや複雑だが、都市労働者を「賃金奴隷」の状態から解放して自立させ、労働力過剰状態を改善し、入植者をチャーティズムの推進力にし、また人民憲章獲得後の社会改造の一端を先取りして提示するというものだった。運動は機関紙『ノーザン・スター』を軸にしたオコーナーらのキャンペーンにより、一八四七年をピークに一時は熱狂的に発展し、分割払いの株主は七万人を超え、集まった資金も九万四千ポンドを超えた。しかし運動が発展すると、チャーティズムの内外から人民憲章を目指す運動を「ぶちこわす」「そらす」、「二〜四エーカーの小農場では自活できない」、あるいはオコーナーは「資金を集めて着服している」などの厳しい批判が出て、オコーナーらとの間で激しい論争が起こった。一八四八年五月以後運動は下火になり、五年には計画 (土地会社) は提唱者のいう目的を達成し得ないとして、法的に解散されることになったが、その過程で一八四七年五月に最初の所領ヘリングズゲイト Herringgate (一九一四年以降ヘロンズゲイト Heronsgate 一〇三エーカー) に三五世帯が入植し (オコーナーウィル O'Connorville と命名)、四九年七月のドッドフォード Dodford (二八〇エーカー) の

三六世帯の入植まで、五入植地に二六五世帯の入植が実現した。⁽¹¹⁾くじ引きによる入植者の選定が「土地くじ」(Land Lottery)などと批判されたので、ドッドフォードの場合は入植者は割増金(Bonus)を出すことになり、各人五五〇一五〇ポンドの金銭を出した。⁽¹²⁾

ヘロンズゲイトはロンドン⁽¹³⁾の西郊外のハートフォードシアに位置し、他の四入植地(第二入植地ロウバンズ Lowbards、第三入植地ミンスター・ラヴェル Minster Lovell、第四入植地スニッグズ・エンド Snigs End、及びドッドフォード)は、さらに北西に順次北上した地点にあり、バーミンガムの東南から西南方に位置している。小農場で自立するというオコーナーの夢は、その後一九世紀後半以降の工業社会の定着と発展、農業を取り巻く状況の変化のなかで遠い夢となり、各入植地の住民も農業とはかわりがない人々へと変遷し、当初の住宅も一部を除いて次第に改変され、現在に至っている。だが狭い道路に沿って、生け垣に囲まれ、農場から緑豊かな庭に変わった独立した敷地に住宅が建つ独自の居住地は、今も往時をしのばせ、周辺の住宅地と比べて異彩を放っている。⁽¹³⁾

一九九〇年代に入り、この入植地とくにヘロンズゲイトとドッドフォードの現在の住民が中心となり、自らの居住地とチャーティズムの歴史の深い因縁に思いを馳せ、入植一五〇周年を記念する運動を起こした。ヘロンズゲイトにおけるその経緯はI・フォスター『ヘロンズゲイト―自由と幸せと満足、所領の最初の二五〇年』(一九九九年)に詳しい。⁽¹⁴⁾一九七〇年代後半にヘロンズゲイトの南側にハイウェイM25の建設計画が持ち上がったことが、住民たちに居住地とその保存への関心呼び覚まし、ヘロンズゲイト住民協会は建設反対を議会に請願

した。同協会の要請を受けた著名な現代史家A・J・P・テイラー(一九九〇年没)は、一九七八年、チャーティズムと土地計画(土地会社)の意義、ヘロンズゲイトの保存の必要性を説く論考を公刊した。⁽¹⁵⁾その後一九九〇年九月には、一八歳以上の全住民を対象に同地を保存地域(conservation area)にするか否かの住民投票が行われ、賛成六三、反対七〇に二分された。その結果、小さな変更は認めるといふ緩やかな保存地域となり、やがて一五〇周年を記念する行事の企画へと進んだ。翌九一年にはヘロンズゲイト・ホール(もとは一九号地に一八八四年に建立されたウェズリー派の礼拝堂)に炊事場と手洗いを設け、ホールの改善・補修を行う資金調達のために舞踏会やバザーを催した。入植一五〇年の一九九七年五月には、二週間にわたる祝賀行事が行われ、ホールを中心にしてヘロンズゲイトの歴史と生活についての展示、二人の専門家ドロシー・トムプソン、ジェイムズ・エプスタインの講演、音楽会、ダンスなどのイベントに周辺からも多数が集まった。フォスターの著書にD・トムプソンは「チャーティスト運動一八三六―一八五六」、エプスタインは「ファーガス・オコーナー(一七九六―一八五五)」を寄稿している。同地域チョーリウッド・リックマンズワースの地区労働党が記念の銘板をつくる提案をしたが、住民は制作者として党の名前を入れるのを拒否し、住民自身の手でホールの入り口に円形の銘板を掲げた。銘文は「庶民院議員、チャーティスト、理想主義者、社会改革者ファーガス・オコーナーによって、この地に一八四七年に建設されたオコーナーヴィルの誇らしき記憶のために」とある。⁽¹⁶⁾

住民による一五〇周年を記念する運動は、一九九六年に第五入植地

窓 ドッドフォード(ウースターシア北東部、バーミンガムの西南方)でも始まり、ドロシー・トムプソンの薫陶を受けたオウエン・アシントンとステイヴン・ロバーツの主催により、バーミンガム大学で九五年

九月に始まった研究集会「チャーティズム・デイ」(Chartism Day)と提携し、九七年からは同研究集会を一年おきにドッドフォードに誘致して地域住民の熱気は大いに高まった。九八年に住民たちは地域の活動を統括するドッドフォード協会(議長ジョン・プール、同地域の広域的な自然保護協会の代表)を設立、一五〇周年に当たる九九年七月には同協会の主催で入植日に当たる二日から一日まで、ヴィリッジ・ホール(一九七七年に建設)を中心にして、研究集会(約一〇〇人出席)のほか、当時の耕作用具も揃えた歴史をたどる展示、「オコーナーの夢」(O'Connor's Dream)と題した演劇や、ダンス、音楽会など多彩な記念祝賀行事が行われた。そのハイライトはホール前の広場に建てられた大理石の記念碑の除幕式であった。記念碑には「チャーティストの入植地グレイト・ドッドフォード、一八四九年七月二日。一九九九年七月にそれを記念して」と刻まれている。研究集会終了後に行われたその除幕式には、地域自治体の責任者も出席し祝辞を述べたほか、二年前に記念行事を終えたヘロンズグレイトの住民多数も駆けつけ、ナショナル・トラストの関係者も含む約二〇〇人ほどが除幕行事を見守り喝采を送った。

テーマを土地計画に絞った研究集会では、S・ロバーツとO・アシントンの司会のもと、ドッドフォード入植地の研究で知られるピーター・シアビー「チャーティストの小住宅」(Chartist Cottages)、ティム・ランドール「チャーティストの歌と詩」(Chartist Songs and

Poetry、バット及びロイ・パーマーの歌唱付き)、土地計画研究の先頭に立つ研究者マルコム・チェイズによる土地計画の意義を積極的に評価した内容豊かな報告「チャーティストの土地計画」(Chartist Land Plan) [報告の内容は後出の二つの論文集 *Chartist Legacy* (1999) 及び *Living and Learning* (1996) に収められたものと同重なりつつも]、筆者の「ファーガス・オコーナーと土地計画」(Fergus O'Connor and the Land Scheme) の発表が行われた。筆者の報告はオコーナーが狂気に取りつかれて収容された精神病院の院長テュークが、彼の発病の原因は彼が情熱を注いだ土地計画にあり、とくに土地計画をめぐる元同志たちから受けた激しい非難・攻撃にある、と確信をもって下した診断から出発し、オコーナーの精神に決定的なダメージをもたらしたその非難・批判の大部分が不当なものであったことを論じ、歪められ見捨てられてきた土地計画が、一五〇周年を慶賀する住民たちの熱意によって、いまはじめて正当な位置を獲得しようとしている、と結んだ。土地計画とチャーティズムの歴史に親しんだ地域住民も質疑に活発に参加し、一五〇周年を記念する実り多い研究集会であった。⁽¹⁷⁾ そのほかドッドフォードの歴史と入植者の変遷を詳細にフォローした住民ダイアナ・プールの報告も行われた。(『チャーティストの最後の入植地』グレイト・ドッドフォード一八四九年)として公開⁽¹⁸⁾。また後にも触れるS・ロバーツとD・トムスン共著『チャーティズムのイメージ』(一九九八年)は、土地計画入植一五〇周年の意図も込めており、土地計画に関する図版六点を収めたほか、表紙にはヘロンズグレイトのどかな情景を描いた一〇歳のアン・ドーンソン Ann Dawson による色彩豊かな刺繍画を掲げている。⁽¹⁹⁾

オコーナーによって建てられた小住宅のうち、原型をほぼそのまま遺すのは“Rosedene”と呼ばれているドッドフォードの二九号地の住宅である。正面玄関の左右に窓付きの二室を配置した住宅は、オコーナーの生まれ故郷アイルランドのごく一般的な民家の様式であり、土地計画のアイルランド的発想の一端を示している。同地のかつての四エーカー農場は今では名のとおりバラが咲き乱れ、数種類の果樹もたわわに実る庭となっている。保存運動が高まるなか、九七年に同家が空き家になった後、同一〇月ナショナル・トラストが買い上げ、教育的史跡として保存し公開する方針を決めた。すべての児童・生徒が一四歳までにチャーティズムについて学んでいる。いま住宅及び四エーカーの地所を一八四九年当時の状況に復元するほか、児童・生徒など見学者を運ぶミニバスを購入し、手洗い所を新たに設置する計画を立て、九九年九月までを目的に募金を進めていた。広大な敷地に数々の歴史的建物を展示する近郊のエイボンクロフト博物館 (Avoncroft Museum of Historic Buildings 在「ブロムズグロウヴ」⁽²⁰⁾)と連携した見学コースを設け、見学者には往時をしのいで農場での耕作、住宅での調理や洗濯を体験させる方針である。この二つの入植地以外のロウバングズ、スニッグズエンド、ミンスターラヴェルの三入植地では、住民たちによる居住地の過去の歴史を復元し顕彰する運動は現時点では起こっていないときく。批判を受けることが多く無視されがちだった土地計画は、チャーティストの遺産に思いを新たにしたい二つの入植地の住民たちの熱意によって、風化しつつあった記憶のなからよみがえり、一五〇年にしてふさわしい史的位置を得たと言えるだろう。

研究集会の報告者でもあったマルコム・チェイズはその後さらに総

括的な論文を発表し、同時代では多くの批判を受けたにもかかわらず、その後の歴史で受け入れられてきた過程を詳細に示しながら、土地計画を再評価している。末尾には『ニュー・ステイツマン』一九九七年七月が記した「オコーナーヴィルというチャーティストのモデル町は緑豊かな田園的な村であり、ペンツを所有する階級の多くが捜し求めている住宅地である」という言葉で結んでいる。⁽²¹⁾

二 一五〇周年前後のチャーティズム研究について

ひとまず土地計画の顕彰運動を離れて、一五〇周年前後のチャーティズム研究の状況の検証に移りたい。まず大衆運動として最後の高揚を見せた一八四八年の一五〇年記念を意図して、チャーティズムを紹介する四小冊が刊行されたことに注目しよう。いずれも最新の研究に目配りしながら、大衆政治運動ないし大衆的民衆抗議運動としてチャーティズムを正當に積極的に評価する姿勢を示している。チャーティズムを含む一九世紀史の碩学エイサー・ブリッグズの『チャーティズム』(一九九八年)はさすがに味がある叙述が多く、⁽²²⁾一九八〇年代以降の研究の進展に配慮して、知性的なチャーティスト、ウィリアム・ラヴェットへの著者の思い入れは維持し続けながら、ギャミッジ、ホウヴェルらの古典書による大衆指導者ファীগス・オコーナーを軽視する見方に修正を加え、⁽²³⁾ドロシー・トムプソンやエプスタインのオコーナーへの高い評価に理解を示し、⁽²⁴⁾著者の新境地を垣間見せている。次に「最初の全国的な労働者の運動」という副題をもつジョン・カールトン『チャーティスト』(一九九七年)は、社会科学的な用語を用いた分析的な叙述に特徴があり、中期の局面で労働者の大衆運動とし

窓
てブラック・カントリの坑夫のストライキから始まり、スタッフオー

ドシア、ランカシア、チェシア、ヨークシアに中心が移って「人民憲
史
章のためのストライキ」に発展した「一八四二年の大衆ストライキ」

に中心的位置を与え、多くのページを当てた。またマルクス・エンゲ
ルスとチャーティズム、チャーティズムと歴史家と題した補論も加え
ている。⁽²⁵⁾

ケインブリジ「歴史の展望」シリーズの一冊リチャード・ブラウン
『チャーティズム』(一九九八年)は、運動の経過を語った各章の末
尾に、関連する史料をあげつつ行なった事例研究の部分を設け、設
問も加え、また「どのような人がチャーティストだったか」「オコー
ナーは正しかったのか」といった章や小見出しもあり、⁽²⁶⁾教育書の性格
が見える。一方、研究史をかなり立ち入って述べ、最近一五年の間に
「歴史家のこの運動をみる見方は大きく変わった」ととらえて、最近
のポスト・モダンないしポスト構造主義の歴史家の見解を紹介しなが
ら、修正派の見方は一九世紀における急進的活動の連続性を強調する
あまり、「運動のダイナミズムと非予見性を軽視している」と論評し
ている。⁽²⁸⁾ 首肯できる解説である。

ランカスター・パンフレットの一冊として刊行されたジョン・ウォ
ールトン『チャーティズム』(一九九九年)は、運動の経過について
は簡略にとどめ、一九七〇年代以降の研究成果に広く目配りしておお
むね的確な評価を与えながら、「チャーティストの目標」(Chartist
Goals)、「チャーティストの諸戦略」、「抑圧と譲歩」国家とチャーテ
ィズム」と題した章で興味深い評価を試みた。次の結びの言葉は新鮮
である。「われわれがチャーティストの目標をどのように規定するか

が、この運動が成功したか失敗したかについてのわれわれの認識に影
響を与える。要求した六項目のどれ一つとして実現しなかったし、そ
の敗退後は半世紀の間、チャーティズムは視界からほとんど消え失
せていた。しかしその高揚した運動と断続的に与えた脅威がなかった
としたら、一八四〇年代の政府があのような譲歩を行ったとはほとん
ど考えられない。チャーティズムは、一部は、民衆を運動に引き込ん
だその目標が達成されたために衰退したのだ。チャーティズムはなぜ
敗北したのかと問うことは、その本質を見誤るものである。興味深い
設問は、それがどの程度まで成功したのかと問うことである。⁽²⁹⁾

さきにあげたロバーツとD・トムプソン共著『チャーティズムのイ
メージ』も、一五〇周年を記念した書物として欠かすことはできな
い。⁽³⁰⁾ これはチャーティズムを画像で示す試みであり、八〇枚の図版を
収録し簡潔な解説を付している。チャーティストの行動、集会やそれ
を風刺した図版のほか、四二点がチャーティスト個人の肖像画ないし
それに近いものからなる。また時期を画した著書『チャーティスト』
(D・トムプソン)において階級意識の高まりの状況を鮮やかに描き
出した著者たちは、⁽³¹⁾一八三九年のニューポート蜂起を「引き起こした
階級闘争の強さと激しさを生き生きと描いた」近年の研究を引き合い
に出しながら、「これと同じ感情は一八三〇年代と一八四〇年代をと
おして、イギリスの多くの地域で見られたものであった」と、一九世
紀の急進主義の連続性を説く最近の修正派の主張に反論している。⁽³³⁾

最近のチャーティズム研究の最先端を担っている研究者の多くは、
D・トムプソンの薫陶を直接ないし間接に受けてきた人々である。現
在そうした研究活動をリードし組織しているのは、ジェイムズ・エプ

スタイン（米国ヴァンダービルト大学）、オウエン・アシュトン（スタッフオードシア大学）、ステイーヴン・ロバート（バーミンガム大学）、ロバート・ファイン（元スタッフオードシア大学）、ネヴィル・カーク（マンチェスター・メトロポリタン大学）、ジョン・ベルチェム（リヴァプール大学）らである。彼らは個人研究のほか、グループですぐれた成果を相次いで世に問うている。そのうちアシュトンとロバートは既述の通りバーミンガム大学を拠点にしたチャーティズム研究集会の組織者であり、さらにファインを加えた三人の編で共同研究の成果を相次いで公開している。その貴重な成果としてまず簡潔な解説を加えたチャーティスト運動の文献目録『チャーティスト運動、解説付き新文献目録』（一九九五年）がある。これはD・トムプスンとジョン・ハリスン編の『チャーティスト運動文献目録—一八三七—一九七六』（一九七八年）の補遺も兼ねながら、刊行時点までのチャーティズム文献を網羅した決定版である。⁽³⁴⁾本書のトムプスン筆の序文は、最近のチャーティズム研究の成果に言及しつつ、一四ページに及んでいる。

さらに二冊の論文集が三人の編集で公開された。一冊はトムプスンの研究活動と薫陶に感謝した一二人の研究者による献呈論文集『不満を表明する義務、ドロシー・トムプスン献呈論集』（一九九五年）である。⁽³⁵⁾書名は詩人チャーティストのトマス・クーパーが一八五三年に行った講演の演題から取られている。同書については、すでに述べたかつてのチャーティズム研究の組織者エイサ・ブリッグズが「本書の諸論文は、労働史とくにチャーティズムの研究に多大の際立った貢献を成し遂げたドロシー・トムプスンへ捧げた、価値のある感謝のしる

しである」と好意的な評価を与えている。⁽³⁶⁾本書の冒頭にはトムプスンの学問的姿勢と業績を顕彰した「模範を示すドロシー・トムプスン、その歴史学とチャーティズムの研究」（ネヴィル・カーク）がある。カークの論考はドロシーの歴史研究の姿勢、技法、方法について夫の故エドワードと並べて高く評価し、そのチャーティズム研究が、階級の視点だけでなく、ジェンダーないし女性の視点及び民族問題とくにアイルランド人とチャーティズムの関連の視点をも合わせてとらえ、新境地を拓いたものであることを確認している。⁽³⁷⁾

第二章以下はドロシーから直接・間接に薫陶を受けた人々による一編の個別論文からなる。題目を示すと「チャーティストの全国指導者について—若干の展望」（ジェイムズ・エプスタイン）、『ノーザン・スター』に寄稿したのはどういう人々か」（ステイーヴン・ロバート）、運動の初期から一八四八年以後の衰退期までポタリーズ（陶業地）の地方活動家だったジョン・リチャーズへの敬愛を込めた「ジョン・リチャーズへの賛辞」（ロバート・ファインソン）、「農村の抵抗—オクスフォードシア南部における慣習、コミュニティ、紛争—」（一八〇〇—一九一四）（ケイト・テイラー）、「職場統制の経緯—一八〇〇—一九〇〇のイギリスにおける非公式主義と職場」（クライヴ・ビハッグ）、『同じ共通の水準へ平準化するのか？ 精神病院における社会階級、一七八〇—一八六〇』（L・D・スミス）、「ヘンリエッタ・スタナードと女性の社会的解放—一八九〇—一九一〇」（オウエン・アシュトン）、「急進的な考え方なのか？ エリザベス・ロビンズ—サフラジット（女性参政権派）の歴史の形成と労働者階級女性の代表

窓権」(アンジェラ・ジョン)、「ウスターシアの第一次大戦期における

貧困と救貧法」(グレン・マッシュウズ)、「もう一つの移入民像——九世紀リヴァプールのアイルランド人の民族的・党派的協力関係」

(ジョン・ベルチェム)、「『われらは皆ソラ地域から移って来た』——パーミンガムのイタリア人、およそ一八二二—一九一九」(カール・チン)となる。これらが対象とする時代は二〇世紀初期までを含み、扱う主題もドロシーの論文集『アウトサイダー』の副題「階級、ジェンダー、ネイション」の範囲全体にわたる(同書はチャーティズムの時代を対象にしている)。

チャーティズムを直接扱っている最初の三編について簡潔に見てみよう。全国指導者について論じるエプスタインは、指導者たちが代表大会(コンヴェンション)を開き、それを現議会に代わる対抗議会(anti-parliament)とさせ位置付けようとし、全国組織として全国憲章協会をつくり、活動家の有給制を推進するなどの活動を論じながら、チャーティストによる大衆動員のスタイル、大衆演壇の活用、言説のレトリックなどを検証する。彼は、G・S・ジョーンズ、P・ジョイスらによるチャーティストの階級意識を運動を支えた主要な要因とはみなさない主張や、チャーティズムから世紀後半の民衆的リベリズムへの連続性を強調するE・ピアジニ説を批判する。⁽³⁸⁾『ノーザン・スター』に掲載された多彩な記事を紹介しながら、スケッチ風にその筆者に迫るのはロバートの論文である。同紙には毎号、地方の集会や示威行動の報告が数多く掲載されているが、例えばアン・ペパー(リーズ女性急進主義協会)、トマス・シムニット(在ニューアーク)などの知られざる弁士が『スター』紙を振りかざして演説したと伝えている。

る。遺言、私生児の問題など身の上相談も多く寄せられ、法律問題ではオコーナー、アーネスト・ジョーンズの両弁護士が回答しており、流刑になった人々の妻の窮状など個人のニュースも豊富に掲載されている。同紙が労働者階級の新聞としてチャーティズムを支えたことを力説する。また同紙には多くの詩が掲載されたが、チャーティズムとオコーナーへの結集を呼びかける詩数点を紹介し、末尾には一八三八—四二年に同紙に掲載された詩の作者七四名を一覧にしている。⁽³⁹⁾ファイソンは一八三〇年に五八歳で議会改革運動に加わり、最高齢で三年のチャーティスト・コンヴェンションの代表となり、四八年とその後まで一貫して運動に捧げたボタリーズの靴職人出身ジョン・リチャーズの生涯(五六年六月に死去)を、敬意を込めてはじめて明らかにする。リチャーズはオコーナーを支持し四二年のコンヴェンション代表にもなり、同年八月のスタッフォードシアの騷擾に関連して逮捕され、禁固一年となった。同じ罪に問われた詩人チャーティストのトマス・クーパーは獄中詩『自殺者の煉獄』のなかで、この老チャーティストに賛辞を贈った。エリスの生涯を明るみに出した後出の論文と同様に、近年の論争には言及していない。⁽⁴⁰⁾

もう一冊は一人の論文を集めたアシントン、ファイソン、ロバート編『チャーティストの遺産』(一九九九年)である。⁽⁴¹⁾本書はチャーティスト研究シリーズ第一輯と位置づけられ、冒頭にブリッグズが序文を寄稿し、編者の求めに応じて彼自身の研究歴を回顧したなかで、オクスフォードで「労働運動」研究を根付かせたG・D・H・コールから受けた多大な薫陶や、チャーティズムと労働史研究とのかわりについて語り、また一九七六年にサンックスからオクスフォードに戻

ったとき(ウースター・カレッジ学寮長)、悲しいかな「労働運動」は消滅しており、またケインブリッジには元来「労働史」はなかった、とも述べている。⁽⁴²⁾

本書の主要な論文について、新しい論点ないし再解釈を提起したものを中心に紹介しよう。まず巻頭の気鋭の研究者マイルズ・テイラーによる「六項目…チャーティズムと議会改革」に注目したい。テイラーの見解のユニークな点は、人民憲章を民衆運動を糾合するための非現実的な象徴であり、六〇年前のウィルクスやカートライトが提唱した議会改革の要求を継承し反復したもの、とみなす従来からのチャーティズム理解に異議を唱え、国制史、議会改革史において、人民憲章とチャーティズムは新次元を画するものであったと説くところにある。一八三九年のチャーティストの勤労諸階級代表大会(General Convention of the Industrial Classes)の活動やその後の彼らの選挙活動からみて、チャーティストは国会議員を「単なる代表(representatives)ではなく、派遣代表(delegates)でなければならぬ」と考えており、「国制上においてチャーティストが与えた最大の脅威は普通選挙権にあるのではなく、委任代表の理論であった」ととらえる。⁽⁴³⁾つまり議員は選出民の意向に忠実に従うべき、という主張であり、これが議会制民主主義の空洞化の歯止めになる。また人民憲章は選挙の実務について半ば以上の頁をさき、有権者(三カ月以上の居住者)の登録、選挙管理官の選任、票の扱いなど事細かに述べているが、これはそれまでの無規律な腐敗した選挙を抜本的に変える「真に革命的文書であった」、と評価する。⁽⁴⁴⁾テイラーは以前にはG・S・ジョーンズらのチャーティズム前後の急進主義の連続性を強調する見解

に従ってきたが、今ではこの論文で示すように連続説は不適當と考えている、と注記している。⁽⁴⁵⁾時は下って一八六六年に都市の労働者層へ参政権の拡大が打ち出されたとき、支配階級にとって最大の恐怖は、労働者階級の選挙区が「選出民の命令にのみ従う派遣代表を選出する」のではないか、ということにあり、チャーティストの遺産は生き続けていた。⁽⁴⁶⁾テイラーの論文は国制史の観点から、これまで見落とされていた問題を明るみに出し、近年の論争にも一石を投じた貴重な研究と言える。

次にオウエン・アショトンの「チャーティスト運動における弁士と雄弁—一八四〇—一八四八」は、自身がチャーティストだった最初の歴史家ギヤミッジの「チャーティスト運動の夜明けはまさしく労働者階級の雄弁の時代(の到来)であった」という論述をまず引き合いに出す。この論文は、チャーティストの主義・主張を活字や文字で書かれたもの(演説の場合はその記事)を素材にして、それを言語論的に分析し評価しようとするG・S・ジョーンズらの見解(いわゆる「言語論的転回」(linguistic turn))の批判も意図しており、この運動の盛衰にとって、話された言葉すなわち演説・集会における指導者・弁士大衆の間の直接の対面関係がより重要な役割をもったととらえ、効果的な弁舌、集会の持ち方を問題にする。⁽⁴⁸⁾

チャーティストの弁士にはオコーナー、オブライエン、ピーター・マクドウアル医師のような中上流階級出身の全国指導者のほか、バースの靴工バートレット兄弟、トゥロウブリッジの帽子工W・キャリアー、ハリファクスの織工ベン・ラシュトンのようなおもに労働者出身の地方的弁士・活動家があり、さらにアイルランド生まれのG・ホワ

窓 イト、絹手織工丁・ウェスト、力織機織工C・ドイルなど一八四〇年

代になって登場する活動家の三種類が認められ、相互にかかわり合

ながらチャーティズムの「運動文化」(movement culture)をつくり

だし、またその中から労働者階級の弁士や大衆活動が生まれた。チャ

ーティズムにおける弁舌の役割について確定的評価は下せないが、運

動が下火になった一八五〇年代においても、公開集会における話され

た言葉の影響力は大きかったのであり、ギャミッジの「チャーティス

ト運動とともに労働者階級のキケロの時代が到来した」という判断は

正しいと結ぶ⁽⁴⁹⁾。新語の「運動文化」や労働者階級の弁士の登場という

視点は興味深い。

R・ファイスン「流刑になったチャーティストウィリアム・エリ

スの場合」は、高揚した一八四二年八月の運動でタスマニアへ二一年

間の流刑になったスタッフォードシア陶業地の活動家エリスの生涯

を、終生過ごした流刑地の生活を中心に初めて克明に追ったものであ

る。夫のもとへの移住を願う妻子の望みはかなわず、彼は自由の身に

なっても製陶業や警察官など点々とし、夫殺害の科で流刑地に来てい

た子持ちのアイランド人女性と再婚したが、生活は荒れ、七一年に

六二歳で没した。そのほぼ一年前にホバートの議事堂前で五〇人ほど

の若者に向けて、われわれは繁栄の恩恵をまったく受けていない、と

熱弁をふるった記録がある⁽⁵⁰⁾。涙を呼ぶ生涯である。

りかかるほど異常となり逮捕された五二年六月まで五年間の、彼のチ

ャーティストとしての議会活動を紹介したもの。彼が独自の立場を貫

き、ウィッグ急進派などと容易に妥協しなかったことが強調されてい

る。後者は併合撤回 (Repeal) とチャーティズムとを結集させること

を念願したオコーナーの活動を、チャーティズム衰退期の彼のアイ

ランドでの活動に焦点を当てたもの。チャーティズム拒否の姿勢が圧

倒的なアイランドで、チャーティズムに共鳴するアイランド民主

主義協会 (Irish Democratic Association) の結成 (五〇年三月) を

支援した。彼の活動は実らなかったが、この組織にはジョン・オーリ

アリなど後のフィニアンも加わっていた。歴史に埋もれていたIDA

の存在と活動を明るみに出したことに注目したい⁽⁵¹⁾。

他の論文については簡潔に述べる。土地改革の問題を扱ってきたア

メリカの研究者ブロンステインの論文はチャーティストがアメリカ合

衆国をどう見たかを取り上げる。初期には「自由の地」と見てアメリ

カ民主主義を評価したが、奴隷制が広く存在し貧富の差が大きく、ア

メリカの改革派も土地独占の改革を訴えていることを知り、共和国は

イメージダウンし、「土地独占」の国とみなすようになったと述べて

いる⁽⁵²⁾。またメイズの論文は、自らのチャーティストとしての活動をつ

ぶさに語ったビーザートと、後にジャーナリストになリかつてのチャー

ティスト時代を過ちであったとして伏せたレザラランドという二人の

対照的な自叙伝について論じる。ビーザートは階級という用語を用いて

はないが、自らをチャーティスト「反徒」(Rebel)と呼び、現在の

社会は「暴君」と「奴隷」に二分されており、自分は奴隷の側に立っ

たとしている。自らのチャーティスト活動を伏せたレザラランドの自

伝と合わせて、急進主義の連続説は妥当しないことを示す事例とみている。⁽⁵³⁾

ハグマンの北東部ニューカースル地域のチャーティズムを扱った論文は、A・H・ボーマントが発刊しR・ブレイキーとT・ダブルデイが後をついだ『ノーザン・リベレーター』（一八三七年一〇月〜一八四〇年一二月）に注目、軽視されてきた同誌について運動史上の役割の再評価を企てた。⁽⁵⁴⁾ またホルルの論文では、“people”（人民大衆）に訴えたチャーティストは、人民大衆の自由と解放を獲得する歴史にアイデンティティを求めて、彼らの運動の正当性を説いていたことに光を当てる。そのほかチャーティストの詩・歌・歌唱に焦点を合わせ、多くの歌を紹介しながら、それらが独自のチャーティスト文化をつくりだし、運動を支えたことを説いたランドールの論文⁽⁵⁵⁾、ハリファックスの旧チャーティストを再結集する試みであった一八八五年の集会を素材にして、チャーティスト・ラディカリズムの継続状況に注意を喚起したアントニー・テイラーの論文もある。⁽⁵⁶⁾

記念論文集として取り上げるべきもう一冊は、オウエン主義、チャーティズム、民衆教育を含む民衆社会史の研究で大きな功績を残したジョン・ハリスンに献呈した論文集M・チェイズ、I・ダイク編『生活と学習―J・F・C・ハリスン記念論文集』（一九九六年）である。⁽⁵⁷⁾ 書名は今や古典書となったハリスンの『学習と生活―一七九〇〜一九六〇、イギリス成人教育運動史の研究』に由来する。同書にはハリスンの業績を検証し評価した冒頭の一章のほか一五編の論文を収めており、うち三編がチャーティズムにかかわっている。以下この三点について要点を述べよう。

「一八四二年における“the People”とはどういう人々か」（ドロシー・トムブソン）は、ジョイスらが階級的性格を薄める意図から“the working classes”なごし“the working people”ではなく“the people”を用いていることを意識しながら、当時のジョン・ラッセル、ピール、マコーリら政治家、リチャード・コブデンら反穀物法運動家あるいは多くのチャーティストが用いた“the people”の意味を考証し、全体として“the working class”の意味で使われたと結論づけている。また“the people”には、“the working class”には含まれにくい労働者家族の女性、庶民の女性や子供も含まれていたが、階級的性格をあいまいにする用語ではない、と説く。⁽⁵⁸⁾ 『われわれは自分たちのために働きたい』―チャーティスト土地計画（「チェイズ」）は、「反動的」「ユートピア的」「ノスタルジアの所産」といった古くからの批判から土地計画を救い出す視点に立ち、土地計画が当時の労働者階級に大きな意味をもっただけでなく、その運動が建築協会（Benefit Building Society）などの現在につながる労働者階級によるさまざまな相互扶助組織の発展の基礎をつくりだしたことを強調する。⁽⁵⁹⁾ ジェンダー史の視点から人民憲章の生みの親ウィリアム・ラヴェットの妻メアリの活動と役割を論じるのは、アイリーン・ヨウの論文である。一八三九年七月ウィリアムが逮捕・収監された後、彼女は生活困窮のなかでコンヴェンション代表に推されたが、代表の席に着くことはなかった。残された資料は少なく、ラヴェットの自伝四七三頁のなかで彼女について語った六頁と三九〜四〇年の数通の手紙に依拠しながら、メアリがチャーティストの妻として運動を支えていたことを説いている。⁽⁶⁰⁾

そのほかホルルの個別論文に注目したい。チャーティズムからリベラリズムへの連続性ないし両者の一体性を力説しチャーティズムを民衆的リベラリズムとみるジョイスは、前述のように、それを証明する事例としてアシュトンのチャーティスト活動家、ウィリアム・エイトキンの自伝をあげている。このジョイスのエイトキン理解に対し、エイトキンを詳細に研究したホルルが反論を発表している。ホルルは、自由主義の活動家となって死去する直前に書いたこの自伝では、確かにチャーティスト時代を軽く流しているが、ここで彼が用いた“the people”は上中流階級を含むものではなく、ほぼ「働く人々」を指しており、一八三〇年代末〜四〇年代のエイトキンは『ノーザン・スター』の記事も伝えるように、働く階級の側に立った活発な活動家であったことを力説した。⁽⁶¹⁾

またこの時期に日本では、小関隆の一八四八年に焦点をおいたチャーティズムとアイルランド・ナショナルリズムの協合状況にメスを入れた研究をはじめ、チャーティスト運動における象徴と言語、及びオブライエンを論じた岡本充弘、運動の前半期について総合的にまとめた中山章による論考、および筆者の研究も公刊された。⁽⁶²⁾

三 二一世紀入ったチャーティズム研究

マーリン・プレス社 (Merlin Press) は前述の『チャーティストの遺産』(一九九七年)、『チャーティズムのイメージ』(一九九八年)に引き続いて、オウエン・アシュトンらドロシー・トムプソンの感化を受けた研究者グループと協力して、一連のチャーティズム研究を公刊し続けている。第三輯は『人民の友——チャーティストの時代の「落

ち着かない」急進派』(アシュトン、ピッカリング共著、二〇〇二年)⁽⁶³⁾、第四輯は『人民憲章——ウィクトリア初期イギリスの民主主義運動』(ロバート編著、二〇〇三年)⁽⁶⁴⁾、第五輯は『民衆のための新聞——チャーティスト新聞の研究』(ジョン・アレン、アシュトン編、二〇〇五年)⁽⁶⁵⁾であり、さらに二〇〇六年には『一八四八年以降のチャーティズム——労働者階級と急進主義教育の政治』(ケイス・フレット著)、『民衆の声——労働、民主主義とチャーティストの政治的一体性の形成』(ロバート・ホル著)⁽⁶⁷⁾、『ファーガス・オコーナー』(ポール・ピッカリング著)⁽⁶⁸⁾という三著の公刊が予告されている。

ここでは第三輯『人民の友』と第四輯『人民憲章』について簡潔に紹介し、他は後に譲ることにする。前者はこれまで本格的な評伝が公刊されていないか、またはそれに近い六人のチャーティストを祖上におき、各人の生涯と活動をまとめている。冒頭は運動の山場で不屈の強硬な発言をして二度の収監を余儀なくされた外科医マクドゥアルを取り上げ、運動の過程で悩む姿も描かれており、興味深い論考である。次はユニテリアン派の牧師で南西イングランドのヨーヴィルで活動した穏健派のヘンリー・ソリを取り上げる。「多方面にかかわったチャーティスト」といわれるソリは長寿を全うして自伝を遺した。三人目のウィリアム・ステイヴン・ヴィリアーズ・サンキーはダブリンの格式高い家系の出身、オコーネルによるアイルランド併合撤回運動にもかかわり、一八三九年のチャーティスト代表大会の委員になったが、運動で大きな役割は果たしていない。次の非国教系牧師ベンジャミン・パーソンは急進派の説教師であり、中流階級との協調をすすめるスタージラの完全選挙権同盟に加わった人物、チャーティストとし

てはさほど注目されていない。五人目はヨークシア生まれ、マンチェスターの礼拝堂付き牧師の身でチャーティズムにかかわったジェイムズ・スコールフィールドを取り上げ、一八三八年〜四二年の活動によりオコーナーから「マンチェスター・チャーティストの礼拝堂付き牧師」の異名をもらったことを明らかにする。著者ピッカリングの博士論文はスコールフィールドを論じていた。最後のリチャード・バグナル・リードは一八三二年生まれであり、一八五〇年代のチャーティズム末期から世紀後半にジャーナリストとして活動した人物、これまでもほとんど紹介されていない。以上のように本書はこれまで取り上げられることが少なかったチャーティストの生涯と活動を明るみに出した貴重な研究である。⁽⁶⁹⁾

第四輯『人民憲章——ヴィクトリア時代初期イギリスの民主主義運動』（ロバート編）は「禁酒チャーティズム」（ブライアン・ハリスン）「チャーティストの闘いとキリスト教、一八三八〜一八四二」（アイルーン・ヨー）のように、過去にも論じられた主題も含まれているが、地域史を扱った「レスターにおけるトマス・クーパー」（ロバート）、北東イングランドのティーズ川下流域のストックトンとミドルズブラを扱ったチェイズの論考、個別論文ですでに紹介したホールによるエイトキン研究は地域史ないし個別研究である。他にチャーティズムの運動方法を扱い、支持者とのみ取り引きする「取引先限定」（exclusive dealing）などを取り上げたピッカリング、『ノーザン・スター』に見られる演説や記事の役割を論じたイェランド、チャーティストの地方への講演活動について、活動の軌跡を組織的に分析しようとしたハウエルの論考が含まれている。本書のテーマと分析は新鮮

みに欠けるものもあるが、チェイズの研究などは新鮮である。⁽⁷⁰⁾

最後にチャーティストを論じた評伝二編にふれておきたい。筆頭の一冊はマイルズ・テイラーによる待望されていたアーネスト・ジョーンズの評伝『アーネスト・ジョーンズ、チャーティズムと政治運動のロマンスー一八一九〜一八六九年』（二〇〇三年）である。マルクスと親交を結び彼の書簡にしばしば登場したジョーンズは、資料紹介を中心にしたジョン・サヴィルの著書を除けば、コール『チャーティストたちの肖像』の一章や小冊子の形でしか評伝が書かれなかった「不遇な」人物であった。テイラーはジョーンズに関する資料を網羅的に調べ上げ（筆者も問い合わせを受けた）、彼の生涯をドイツで育った少年時代から、帰国後に弁護士資格を取り文芸活動でスタートし、おもに政治ジャーナリストとして生涯を送った姿を客観的に描き出した力作である。章のタイトルも、チャーティズムに登場した時期を「愛国派の詩人」、もっとも過激な発言を行い獄中生活を余儀なくされた時期を「殉教派の詩人」、チャーティズムの終幕期にいくつかの機関誌を発行して運動を再び盛り上げようとした時期を「貧民のための編集者」、マンチェスターに移って弁護士活動を展開した時期を「民衆の弁護士」、自由党と結んだ民衆政治家として政治の舞台に登場した最後の時期を「民衆の首領」という用語を与え、そのチームにそってジョーンズの実像を描こうとしている。ロマンティックな政治運動家の側面がより大寫しになり（この点は筆者も同感する）、マルクス主義にもっとも接近したというサヴィルら一世代前の議論とは一線を画し、かといって近年流行の脱階級的史論を補強する傾向もまた見られないという作品である。⁽⁷¹⁾

残るは『共産党宣言』の最初の英訳者として知られるマクファールンについての不十分な評伝デイヴィッド・ブラック『ハレン・マクファールン——一九世紀中期のフェミニスト、革命的ジャーナリスト、及び哲学者』（二〇〇四年）である。マクファールンについての最初の単著であるが、彼女の論説がしばしば掲載されたハーニーの機関誌やマルクスの書簡に親しんでいるものにはあまり新鮮みがない。⁽⁷²⁾

おわりに

チャーティズム研究はドロシー・トムブスンあるいはガレス・ステッドマン・ジョーンズの世代の手を離れ、新しい世代の研究者によってなお活発に推進されている。「チャーティズム・デイ」の研究集会は二〇〇〇年から六月の開催となり、バーミンガム大学とスタッフワードシア大学で交互に開催されている。新しい成果は地域史と評伝研究の分野でとくに顕著に現れている。階級史の視点を外そうとする脱階級史的傾向も見られるが、現実には階級を無視してチャーティズムを描くとすれば、それはきわめて歪曲した歴史を描くことになるであろう。近年の論点は、一八三〇年代までについては階級の視点が不可欠という点で両派ともほぼ認めているので、一八四〇年代以降に焦点が移ってきている。それは脱階級史の立場にたつ研究者が、対象を一八四〇年代以降に設定したことに端を発している。⁽⁷³⁾ 論争はなおつづいているが、問題は脱階級派の史家たち⁽⁷⁴⁾にしばしば見られるような生半可な実証で決着がつくものではなく、綿密な本格的実証によって論証されなければならない。本格的な実証はなお今後の課題であるが、最後に参考としてエプスタインの論集をあげておきたい。⁽⁷⁴⁾

(1) Neill Stewart, *The Fight for the Charter*, London 1937. Reg

Groves, *But We Shall Rise Again: A Narrative History of Chartism*, London, 1938. それに先行する著書としてキャマッジ、ホウエル、ウエスト、及びコロンビア大学叢書のローゼンブラット、スロウマン、ノークナーによる著作をあげておかなければならぬ。

R. Gammage, *History of the Chartist Movement 1837-1854*, 2nd edn. 1894, 1st edn. 1854. M. Howell, *The Chartist Movement*, Manchester, 1918. J. West, *A History of the Chartist Movement*, London, 1920. Frank F. Rosenblatt, *The Chartist Movement, Its social and economic aspects*, New York, 1916. P. W. Slosson, *The Decline of the Chartist Movement*, New York, 1916. H. U. Faulkner, *Chartism and the Churches*, New York, 1916. 一九七〇年以前のチャーティズム研究については拙稿「チャーティズム運動研究の最近の動向」『史学雑誌』八〇一六、一九七一年を参照。

(2) Daid Williams, *John Frost: A Study in Chartism*, Cardiff, 1939.

(3) G. D. H. Cole, *Chartist Portraits*, London 1941. rep. with introduction by A. Briggs 1965. 古賀秀男・岡本充弘・増島宏訳『チャーティストたちの肖像』法政大学出版局、一九九四年。本書についてはブリッグズの序文と筆者の訳者あとがきを参照。

(4) G. D. H. Cole, *A Short History of the British Working-Class Movement 1789-1947*, London, 1947. 林健太郎・河上民雄・嘉治元郎訳『イギリス労働運動史』全三巻、岩波書店、一九五二、一九五三、一九五七年。A. L. Morton, *The British Labour Movement 1770-1920, History*, London, 1956. 古賀良一訳『イギリス労働運動史』法政大学出版局、一九七〇年。

(5) John Saville, *Ernest Jones: Chartist, Selection from the Writings and Speeches of Ernest Jones with Introduction and Notes*, London, 1952.

(6) A. R. Schoyen, *The Chartist Challenge: A Portrait of George Julian Harney*, London, 1968.

- (7) F.C.Mather, *Public Order in the Age of the Chartists*, Manchester, 1959.
- (8) A. Briggs ed., *Chartist Studies*, London, 1959. 本書は地方史研究が総論とマンチェスター、リーズ、レスター、サフォーク、サマーセットとウイルトン、ウエールズ、グラスゴウを対象にした八編、テーマ研究が総論に始まり土地計画、反穀物法同盟との関係、チャーティストに対する政府の対応、を論じた四編からなる。ブリッグス自身の研究の歩みについては、後出註(41)の *The Chartist Legacy* に寄せた序文を参照。
- (9) P. Joyce, *Work, Society and Politics: The Culture of the Factory in Later Victorian England*, Brighton, 1980. G. Stedman Jones, "Language of Chartism", in *The Chartist Experience: Studies in Working-Class Radicalism and Culture, 1830-1860*, edited by James Epstein and Dorothy Thompson, London 1982. G.S. Jones, *Languages of Class: Studies in English Working-Class History 1832-1982*, Cambridge, 1982. C. Calhoun, *The Question of Class Struggle: Social Foundations of Popular Radicalism during the Industrial Revolution*, Chicago, 1982.
- (10) 後期の指導者アーネスト・ショーンズの生誕一五〇年、没後一〇〇年を記念したロシアのロンコフの次の論文は例外と言えらる。B. A. Рожков, Эрнест Джонс—Один из первых пролетарских революционеров, 《Новая и Новейшая История》, 1969, No. 2. 拙稿「アーネスト・ショーンズとチャーティズム—ロンコフ「アーネスト・ショーンズ—最初のプロレタリア革命家の一人」邦訳と解説—」『山口大学教養部紀要』第六巻、一九七二。後述するようにその後マイルズ・テイラーによるショーンズの評伝が刊行された。Miles Taylor, *Ernest Jones, Chartist and Journalist*, Cambridge U.P., 2003.
- (11) 土地計画については拙稿「チャーティストの土地計画について」『史学雑誌』八二—七・八（一九七三年）、拙著『チャーティスト運動の研究』ミネルヴァ書房、一九七五年、第四章、同『チャーティスト運動』教育社、一九八〇年を参照。cf. Joy MacAskill, "The Chartist Land Plan", in A. Briggs, ed., *Chartist Studies*. op. cit.: Alice Mary Hadfield, *The Chartist Land Company*, Newton Abott, 1972. rev. edn., Aylesbury 1999. Peter Searby, "Great Dodford and Later History of the Chartist Land Scheme", *Agricultural Hist. Rev.*, Vol. 16, pt. 1 (1968). Jamie L. Bronstein, *Land Reform and Working-Class Experience in Britain and the United States, 1800-1862*, Stanford U.P., 1999.
- (12) *Northern Star*, 23 July 1849.
- (13) 筆者は一九七七年と一九九一年にくロンズゲイトを、一九七七年と一九九一年にドットフォードを訪れた。二二年の間にくロンズゲイトの諸住宅は増改築、建て替えにより大きく変わっていたが、狭い道路と生け垣にはほとんど変化はなかった。旧入植村を出たところに「自由の地」(Land of Liberty) という名前のペブもある。原型をある程度とめているのは四つの住宅のみで、ドットフォードの方が多く原型をととめている。くロンズゲイトについては次掲フォスターの著書を参照。
- (14) Ian Foster, *Heronsgate: Freedom, Happiness and Contentment—The First 150 Years of Estate*, Rickmansworth, Herts. 1999, 224 p.
- (15) Ibid., pp. 161-63. なおテイラー本人となったハンガリー出身のエヴァ・ハラツィは、この時期にブダペストでチャーティズム研究書を刊行している。Eva H. Haraszi, *Chartism*, translated from Hungarian original by Sándor Simon, Budapest, 1978, 276p.
- (16) Ian Foster, op. cit., pp. 169-72. この一連の記念行事を紹介した同年七月二十五日号の『ニュー・ステイツマン』は、「チャーティストのモデルタウンのオコナーヴィルは、今日では緑豊かな田園的な理想の村であり、メルセデス車を所有する階級が熱心に探し求めている」と書いた(ポール・スピーカー筆)。Ibid., p. 173.
- (17) Chartist Dodford: Celebration of 150 Years of History—2nd to 11th July 1999. (記念祝賀行事の小冊子)ドットフォードで行われた一九九七年の研究集会の報告テーマは次の通り。[一九九七年九月一日] Robert Fyson, "Transported Chartist—the case of William Ellis" (オーストラリアに流刑になったウィリアム・ellisについての

個別研究); Michael Miller, *The British Army and the Chartists* (新進研究者による、兵士の四〇%をアイルランド人が占めたイギリスの軍隊とチャーティズムとの関係の客観的な分析); Diana Poole (後出のドットフォード住民), "The Charter"; Zena Christie (住民), "The Land Company in Dodford"; Peter Searby, "Dodford Revisited". [一九九八年九月二二日、バーミンガム大学] Paul Pickering, "Feargus O'Connor and Ireland in 1848-50" (普通選挙権運動とアイルランドの合同撤回とを組合をせよとしたオローナーの活動とその挫折を述べた); Joan Hugman, "Tyneside Chartism and the Northern Liberator" (『ノーザン・リベレーター』を通じてタイン川地域のチャーティズムを論じた); Edward Royle, "Chartists and Owenites—many parts but one body" (チャーティストとオウエン派が緊密な関係にあったことを述べた) ノアイスン (元スタップフォードシア大学)、ビッカリング (オーストラリア国立大学)、クワン (ノースアンリア大学) の報告は後出の論文集で公開された。チャイスには次の著書があり、最近さらに土地計画を肯定的に評価する力稿を発表している。M. Chase, *'The People's Farm': English Radical Agrarianism, 1775-1840*, Oxford, 1988.

- (18) Diana Poole, *The Chartist Land Settlement: Great Dodford 1849*, published in association with the Dodford Society, 1999, 64p.
- (19) Stephen Roberts and Dorothy Thompson, *Images of Chartism*, Merlin Press, London 1998, p. 6.
- (20) ノロイスブロウの博物館としてここを参照。Quintin Watt ed., *Bromsgrove Guild: An Illustrated History*, Bromsgrove Society, 1999, esp. p. 98.
- (21) Malcom Chase, "Wholesome Object Lessons": The Chartist Land Plan in Reprospect", *English Historical Review*, 118, no. 475 (Feb. 2003), pp. 59-85.
- (22) Asa Briggs, *Chartism*, Sutton Publishing Ltd., Stroud, Gloucestershire, 1998. p. 93ff. 11章の "The Charter" は人民憲章の生みの親ウィットンの役割を正道に評価している。cf. W. Lovett, *Life*

and Struggles of William Lovett, in his pursuit of Bread, Knowledge and Freedom, London, 1876.

- (23) Briggs, pp. 106-07. cf. R. G. Gammage, op. cit.; Mark Hovell, op. cit.
- (24) Briggs, pp. 104-05. 運動の経過を語った三章の Narrative も随所どころ叙述があるが、末尾の "The Chartists" と "Interpretations" の叙述は簡潔ながら、フランスがとれており、味読すべからぬ。
- (25) John Charlton, *The Chartists: The First National Workers' Movement*, Pluto Press, London, 1997, 110p.
- (26) Richard Brown, *Chartism*, Cambridge U.P., 1998, pp. 23ff., 82.
- (27) Ibid., Preface v.
- (28) Ibid., p. 8.
- (29) John K. Walton, *Chartism*, Lancaster Pamphlets, London 1999, p. 79.

そのほか一九二〇年代以降、チャーティズムの全体像を紹介した次の六種類の小冊が公開されたことを確認している。F. C. Mather, *Chartism*, Historical Association Pamphlet, London, 1965. 32p. Peter Searby, *The Chartists*, Longman, London 1967, 96p. Edward Royle, *Chartism*, Longman, 1980, 2nd edn. 1986, 3rd edn. 1996, 153p. Richard Brown and Christopher Daniels, *The Chartists, Documents and Debates*, Macmillan, 1984, 138p. J. R. Dinwiddy, *Chartism*, Historical Association pamphlet, London, 1987, edited in ditto., *Radicalism and Reform in Britain, 1750-1850*, Hambledon Press, London, 1992. D. A. Reeder, *The Age of the Chartists*, Brodie's Aids to History, Somerset, no date (1969?). やりかたは時期を扱った次の小冊を参照。Chris Steer, *Radicals and Protest 1815-1850*, Macmillan, 1986, 56p.

- (30) Stephen Roberts and Dorothy Thompson, *Images of Chartism*, op. cit. 110p.
- (31) Dorothy Thompson, *The Chartists, Popular Politics in the Industrial Revolution*, London and New York 1984. 古賀泰敏・岡

- 本邦論『チャーティスト』日本評論社 一九八八年。
- (32) David J. V. Jones, *The Last Rising, The Newport Insurrection of 1839*, Oxford, 1985.
- (33) D. Thompson, *The Chartists*, p.1. 同上訳書。
- (34) Owen Ashton, Robert Fyson and Stephen Roberts ed., *The Chartist Movement, A new annotated bibliography*, Mansell, London 1995. J.F.C. Harrison and Dorothy Thompson ed., *Bibliography of the Chartist Movement, 1837-1976*, Harvester, Sussex, 1978.
- (35) Owen Ashton, Robert Fyson and Stephen Roberts, *The Duty of Discontent: Essays for Dorothy Thompson*, Mansell, London 1995. 本書にはトムプソンの著作目録 (Dorothy Thompson: a Select Bibliography) が収められている。なお本書には、一九九四年一〇月に五三歳で他界した、社会史・民衆史研究で多大の成果を残したウーエルズ (スウオクンジー) のデイクライト・シムーンズを寄稿する予定であった。D・シムーンズ追悼論集が最近、次の形で上梓され、D・トムプソンが献章の辞 (David Jones: An Appreciation) を寄せている。David W. Howell and Kenneth O. Morgan eds., *Crime, Protest and Police in Modern British Society: Essays in Memory of David J. V. Jones*, Univ. of Wales Press, Cardiff, 1999. 本書のチャーティスト関係では初期にシムーンズの薫陶を受けたホウエン・アシントンによる一編がある。Owen R. Ashton, "W. E. Adams, Chartist and Republican in Victorian England". トムプソンの前著及びロークーシの著書も参照。ditto., *W. E. Adams, Chartist, Radical and Journalist (1832-1906)*, Bewick Press, Tyne and Wear, 1991. Stephen Roberts, *Radical Politicians and Poets in Early Victorian Britain: The Voices of Six Chartist Leaders*, The Edwin Mellen Press, Lampeter, Wales & Lewiston, New York 1993.
- (36) *Times Higher Education Supplement*, 1995.
- (37) Nevil Kirk, "Setting the Standard: Dorothy Thompson, the Discipline of History and the Study of Chartism".
- (38) J. Epstein, "National Chartist Leadership: Some Perspectives".
- (39) S. Roberts, "Who Wrote to the *Northern Star*?"
- (40) R. Fyson, "Homage to John Richards".
- (41) Owen Ashton, Robert Fyson and Stephen Roberts ed., *The Chartist Legacy*, Merlin Press, 1999.
- (42) Ibid., Foreword by Briggs, xi-xvi.
- (43) Miles Taylor, "The Six Points: Chartism and the Reform of Parliament", Ibid., pp.1-3.
- (44) Ibid., pp.10-12.
- (45) Ibid., p.20. 細田 G.S. Jones, *Languages of Class* のほか、エウジニオ F. Biagini and Alastair J. Reid, eds., *Currents of Radicalism: Popular Radicalism, Organised Labour, and Party Politics in Britain, 1850-1914*, Cambridge 1991. J. Vernon, *Politics and the People: A study in English political culture, c.1815-1867*, Cambridge 1993.
- (46) Miles Taylor, pp.18-19.
- (47) Owen Ashton, "Orators and Oratory in the Chartist Movement, 1840-1848", Ibid., pp.48-50.
- (48) Ibid., pp.52-61.
- (49) Ibid., p.70.
- (50) Robert Fyson, "The Transported Chartist: the Case of William Ellis", Ibid., pp.80-101.
- (51) Stephen Roberts, "Feargus O'Connor in the House of Commons, 1847-1852", Ibid., pp.102-118.; Paul A. Pickering, "'Repeal and the Suffrage': Feargus Connor's Irish 'Mission', 1849-50", Ibid., pp.119-146.
- (52) Jamie L. Bronstein, "From the Land of Liberty to Land Monopoly: the United States in a Chartist Contest", Ibid., pp.147-170. トムプソンとは、註(口)に於いた新聞がある。
- (53) Kelly J. Mays, "Subjectivity, Community, and the Nature of 5

- Truth-telling in Two Chartist Biographies”, Ibid., pp.196-231. 本書に対象とする自叙伝は次の二篇である。John James Beezer, “Autobiography of One of the Chartist Rebels of 1848”, in David Vincent, ed., *Testament of Radicalism: Memoires of Working-Class Politicians 1790-1885*, London, 1977. J.A. Leatherland, *Essays and Poems with a brief Autobiographical Memoir*, London, 1862.
- (54) Joan Hugman, “‘A Small Drop of Ink’: Tyneside Chartism and the *Northern Liberator*”, pp.24-47.
- (55) Timothy Randall, “Chartist Poetry and Song”, pp.171-195.
- (56) Antony Taylor, “Commemoration, Memorialization and Political Memory in Post-Chartist Radicalism: The 1885 Halifax Chartist Reunion in Context”, pp.255-285.
- (57) Malcolm Chase and Ian Dyck, *Living and Learning, Essays in Honour of J.F.C.Harrison*, Scolar Press, Aldershot, 1996. チャーティストにはロンドンへの靴職人チャーティスト、アノン・ヌヴァンポートの生涯を論じた次の書物もある。M. Chase, *The Life and Literary Pursuits of Allen Davenport*, Scoler Press, 1994.
- (58) Dorothy Thompson, “Who were ‘the People’ in 1842?”, pp.118-132.
- (59) Malcolm Chase, “‘We wish only to work for our ourselves’: the Chartist Land Plan”, pp.133-148.
- (60) Eileen Janes Yeo, “Will the real Mary Lovett please stand up? Chartism, gender and autobiography”, pp.163-181.
- (61) Robert G.Hall, “Chartism Remembered: William Aitkin, Liberalism, and the Politics of Memory”, *Journal of British Studies*, 38 (October 1999), pp.445-470. Patrick Joyce, *Vision of the People, Industrial England and the question of class 1848-1914*, Cambridge U.P., p.1991, pp.37-38, 64-65f. 階級の問題を論じた次の論考も参照されることがある。松本龍夫「階級は時代遅れか?——イギリス社会史におけるポスト・モダン主義とその批判的検討」『慶應義塾大学』

- 学研究』七七—一、二〇〇四年。
- (62) 小関隆『一八四八年——チャーティストとアイルランド・ナン・マナリズム』未來社、一九九三年。
- 岡本充弘「シエイムズ・ブロンテル・オプライエン試論」『東洋大学文学部紀要・史学科編』一九、三二—五八頁、一九九三年。同「チャーティスト運動における象徴と言語」同上誌、二〇、四三—五九頁、一九九四年。同「シエイムズ・ブロンテル・オプライエン試論——シャエボン主義とオプライエン」同上誌、二三、一一—二五頁、一九九七年。同「シエイムズ・ブロンテル・オプライエン試論——人間奴隷制の出現・進展・諸局面」同上誌、二八、一七五—一九七頁、二〇〇三年。
- 中山章「チャーティスト運動 一八三八～一八四二年」『神戸大学発達教育学部研究紀要』六、九一—一九九頁、一九九九年。同「チャーティスト運動 一八四〇～一八四二年」同上誌、八、一四七—一七五頁、二〇〇〇年。
- 古賀秀男『チャーティスト運動の構造』ニホルク書房、一九九四年。同「チャーティストたちの素顔——収監された草の根チャーティストの実像」『史窓』（京都女子大学史学会）五五、四三—六六頁、一九九八年。
- (63) Owen Ashton and Paul A.Pickering, *Friends of the People, Uneasy Radicals in the Age of the Chartists*, Merlin Press, London, 2002.
- (64) Stephen Roberts ed., *The People's Charter, Democratic Agitation in Early Victorian Britain*, Merlin Press, 2003.
- (65) Joan Allen and Owen Ashton eds, *Papers for the People: A Study of the Chartist Press*, Merlin Press, 2005.
- (66) Keith Flett, *Chartism After 1848, Working Class and the Politics of Radical Education*, Merlin Press, 2006.
- (67) Robert G.Hall, *The Voice of the People, Labour, Democracy and the Making of the Chartist Political Identity*, Merlin Press, 2006.
- (68) Paul A.Pickering, *Feargus O'Connor*, Merlin Press, 2006.

- (68) Ashton and Pickering, *Friends of the People*, op. cit.
- (69) S. Roberts, ed., *The People's Charter*, op. cit.
- (70) Miles Taylor, *Ernest Jones, Chartism, and the Romance of Politics 1819-1869*, Oxford U.P., 2003.
- (71) David Black, *Helen Macfarlane, A Feminist, Revolutionary Journalist, and Philosopher in Mid-Nineteenth-Century England*, Lexington Books, Lanham, Maryland, 2004.
- (72) 国境への研究をめぐって。 Patrick Joyce, *Vision of the People: Industrial England and Question of Class, 1840-1914*, Cambridge, U.P., 1991. ditto., "The People's English: Language and Class in England c. 1840-1920", in P. Burke and R. Porter, eds., *Language, Self and Society, A Social History of Language*, Polity Press, Cambridge, 1991. John Belchem and Neville Kirk ed., *Languages of Labour*, Ashgate Publishing Ltd., Hants., 1997. Dror Wahrman, *Imaging the Middle Class: the political representation of class in Britain c. 1780-1840*, Cambridge 1995. James Epstein, *Radical Expression: Political Language, Ritual, and Symbol in England 1790-1850*, Oxford U.P., 1994. Neville Kirk, *Change, Continuity and Class: Labour in British Society 1850-1920*, Manchester U.P., 1998. Miles Taylor, *The Decline of British Radicalism, 1847-1860*, Oxford 1995. M. C. Finn, *After Chartism: Class and nation in English radical politics, 1848-74*, Cambridge 1993. Marc W. Steinberg, *Fighting Working-Class Formation, Collective Action, and Discourse in Early Nineteenth-Century England*, Cornell U.P., 1999. Anna Clark, "The Rhetoric of Chartist Domesticity: Gender, Language, and Class in the 1830s and 1840s", *Journal of British Studies*, 31 (January, 1992). Jaqueline Fellague Ariouat, "Rethinking Partisanship in the Conduct of the Chartist Trials, 1839-1848", *Albion*, Vol. 29, no. 4 (1997). 大衆の個人文化をめぐって。 Robert G. Hall, "A United People? Leaders and Followers in a Chartist Locality, 1838-1848", *Journal of Social History*, fall

2004.

- (74) James Epstein, *In Practice, Studies in the Language and Culture of Popular Politics in Modern Britain*, Stanford U.P., 2003.